

---

# Fate/stay night if **ーもう1人の狂戦士ー**

黒の契約者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/stay night | もう1人の狂戦士 |

### 【コード】

N0200R

### 【作者名】

黒の契約者

### 【あらすじ】

Fate/stay nightの世界に召還されたのは本来は召還されるはずのない戦士 ベルセルク が召還されたオリキヤラマスターと狂戦士はFate/stay nightの世界で生き残ることが出来るのか!?

## stage 1

オリジナル主人公設定

アリサ・クロフォード

容姿は長髪で金髪、たてロール。目も髪と同じで金色。

1人暮らし

親が日本に来て働いていたが交通事故で亡くなった  
それまで、みんなの中心人物だったが両親の死のショックから無口  
になり友達がいなくなっていったが桜だけは何時も喋り掛けてくれ  
ていたので桜をとて信用している

今ではもう十分回復しているがまたに感情を制御仕切れないことがある

本国に居たときに魔術の基本を教えられていたので基本的な魔術は  
使える。そのことは桜にも教えてない

s t a g e 1 (後書き)

勢いでつい(笑)

感想で作者のやる気は上がります

## Stage 2

女子生徒がお弁当を食べながら仲良く、たわいのない話で盛り上がっていた

物語に大きく関わってくる金と紫の髪子も女子生徒と同じく当たり前のように笑っていた

その2人は美しく周りよりひとときわ目立っていた

しかし、その顔は少し儂げなことには誰も気づいて居ない

…もしかしたら自分ですら気づいてすらいないかもしれない

まるで、残りの生活を精一杯楽しんでのかもしれない

お互いが傷つかないように、秘密を隠し合っている

大切な親友を怪我させるためにはいけないから

1人の女は、親友の体に住んでいる虫を取り除くため、もう1人は家のため道具として参加するのだ

…聖杯戦争という名の殺し合いに

2人は何時もどつりに一緒に帰った

次に逢うのは戦いの最中とは考えもせず  
に…

### Stage 3

深夜1人の女は英霊サーヴァントの召還の為地下室に来ていた

「本当にこれで英霊を呼ぶことができるのでしょうか」

部屋の中心にある呪文のようなものが書いてあるサークルの傍に立っている金髪の女がポツリと呟いた

彼女が見ている先には彼女の背丈より遙かに大きい風化した剣が置いてあった

「叔父様が言うにはアーサー王が使っていた大剣を手に入れたっていただけ、コレは本物かしら？」

剣を眺めながら目の前のそれを振り回す男の姿を想像する

少ししたあと彼女は少しほころんだ顔をブルブルと首を振り、

来るべき時間の為に集中する事にした

部屋にはただ時を刻む時計の音しか聞こえない

その静寂は彼女の集中力の高さを物語っている

そして、遂に待ちに待った時間が来た

彼女は目をカッと開いて呪文を詠唱しだした

告げる

汝の身は我が下に

我が運命は

汝の剣に

聖杯の寄るべに従い

この意 この理に

従うならば応えよ

誓いを此処に

我が常世総ての善と成る者



我は常世総ての悪を敷く者

汝三大主言霊を纏う者

抑止の輪より来たれ

天秤の守り手よ

少女が呪文を唱えたあと一瞬、部屋一面を白で塗りつぶすほどの光が発生した

部屋が光に包まれていく中彼女、アリサは召還の手応えが有ったのか常時ニヤニヤしていた

(これは、最強のサーヴァントを引き当てましたわよ。例え、あの大剣がアーサー王ではなくても使っている人物は相当な強さの筈。そう、あれを使っている方はムキムキのおじ様しかいませんわノノでも、私には桜がノノノ)

しばらくアリサが悶々としている間に光が収まり始めた

「さあ、私のサーヴァント、姿をあらわせなさい」

そして光が完全に収まり、其処にあらわれたのは

『妖精だった』

それも手の平に収まりそうな小さな妖精だった

少し、お互いに沈黙が流れたが先に破ったのはアリサの方だった

「あの、あたしのサーヴ」だよ」デスヨネ 叔父様の嘘つき」

そう呟きアリサはその場にへたり込んだ

(格好いいおじ様でもないし、小さな妖精だなんて 第一あの剣は  
持てないでしょう)

妖精をポーッと見ながらある事に気付いた

「剣が元に戻っている」

そうなのだ。召還する前は確かに風化して下手に扱おうとしたら崩

れてしまつぐらいだったのだが、今ではその面影一つ残さず、漆黒の大剣が静かにそこに置いてあったのだ

アリスはスツと立ち上がりフラフラと剣の元に向い、持ち上げようとしたが、

(びく、びくもしない!?)

私には少し上げるのが限界と諦めようとした時

「腰がはいっちょらん」

「えっ」

「腰を入れて ほら、こつだ、こつ」

妖精、エルフ?が剣を持つ真似をしていたので自分もその真似を試してみる事にした

でも、まずは気になっていた事を聞いた

「あなたはエルフ?名前は?」

「人の名前を尋ねる時はまず自分から名乗るがよい  
オレはパック!エルフ次元流七段」

「わ、私はアリサよ。アリサ・クロフォード」

パックという妖精はうんうんと頷くと

「それではアリサとやら気合を入れてそのまま一気に」

「なんで」

「その剣を持ち上げると宇宙一の力を手に入れることが出来るからです」

「本当？」

「本当です（笑）」

いわれるがままアリサは剣を持ち上げようとする

「せいの

「んっ」

何とか剣の柄を顔の高さまであげることに成功したがこれ以上、上げることも下げる事も出来ないのて剣を離してスツと避けるつもりだったが、パックが剣に乗って来たので体重が後ろになってしまった

「おい、怪しい奴捕まえたぞ」

誰に言っているかは分からないが、アリサは非常に危ない状態かわ

かる

今の状態は顔の上で剣の柄を支えており、体が弓なりになっている状態である

このままいくと、手が剣を支えられずに離してしまい剣の重みで背骨を折ってしまう可能性もある

「パツク、早くどいて、背骨が折れちゃう!!」

アリスは少し泣いており必死に頼むがどいてくれない

「お願いだからどいて」

そう弱々しく言うとアリスは泣いてしまった

「おい、パツク何してるんだ」

その声が聞こえたかとおもったか否や自分を抑え付けていた重さが消えた

その安堵からかアリスは床へペタリと腰をおとした

そして、自分を助けてくれた人にお礼を言うために振り返ると、先程の大剣を片手で背中に仕舞おうとしている男が佇んでいた

「大丈夫か」

そう言ってまだ乾いていない涙を拭ってくれた

「ハッ、はい／＼」

その仕草だけでドキッとしたがそこには、黒髪短髪で顔中に傷があり、黒いマントを羽織った荒々しい男が立っていた  
もしかしたら、この人が自分のサーヴァントかも知れないが分からなかったので取りあえず名前を聞くことにした

「お名前はなんて言うつんですか」

少しした間のあと真っ黒の騎士は答えた

「俺は、ガッツ                    ただの庸平さ」

そこから2人(+1匹)の聖杯戦争が始まるうとしていた

stages (後書き)

感想や要望を求めます

ルート選択

桜&amp;mp;ライダー

キャスター

セイバーor凛

なんも無い場合作者が決めます (^w^)

## Stage 4

漆黒の騎士は先程アリサから奪った、いや 取り替えた大剣を軽く振り回して体の調子を調べているようだ

それをなんてこともない様子で振り回す彼 ガッツにアリサは見とれていた

(凄い 私が全力でも持ち上げようとしてもダメだった剣を さすが英霊といったところですね)

ある程度、素振りをして満足したのか漆黒の騎士は大剣を背中に背負った

「大きい」

そうなのだ。目の前にいる男は自分より遙かに大きい しかし彼の背負っている大剣は彼より大きいのだ  
改めて異常な剣のでかさを実感した

ガッツがこっちを見ていたがなかなか話し出さないのでこちらから切り出す事にした



「あな「おまえが」「」

（失敗した。余計に気まづくなった…）私が俯いてどうしようか悩んでいると

「取りあえずここを出よう」

そう喋ったかと思うと大剣を担いで壁（鉄筋コンクリート）を壊そうとしていた  
私は慌ててそれを止める。地下室の壁を壊したら確実に家が傾くからです

「何するんですか」

ちよとだけ驚いた顔で

「捕まってたんじゃないのか」

「違います、ただは地下室で召還しただけです」

「すまないな、余りにもボロだったもので、女が廃屋に監禁されていると思ったもんでな。では、上に行くか」

喋り終わるとクルッと回って階段に向かって行った

(ボロボロで悪かったわね。第一マスターに挨拶一つしないな「ちよっとガッツ待てよ」 いたわねこんなの。忘れてたけどさつきコイツに殺されかけたのよね どうやって仕返しをしよう)

そんな事を考えながら上に通じる階段を上がって行った

「居間」

「お前が俺のマスターか」

「そつよ私がマスターよ。ところで聴いていい？アナタの肩に座っている妖精？みたいなのは何かしら 多分サーヴァントはアナタの方だからそつちはオマケって訳？」

「ちが「そつだ」う」

さつきパツクと名乗っていた妖精が違うと抗議したがガッツが一瞬で肯定したのでシュンとしていた

パツクがショックでフラフラと、どこかへと飛んで行ったので少し罪悪感を感じながらも次の質問をしてみた

「あなたのクラスは何？あなたの剣からしてアサシン でわなくセイバーでいいかしら。あと、さつき傭兵と言っていたけどアーサ

「王じゃないの」

「ああ――俺はアーサー王じゃねー傭兵だ。王は嫌いだ、自分で何もしねーでふんぞり返ってるヤツらばっかだ」

「そうなの」

そう答えたアリサは引きつった顔をしていた

それもそうだ。自信満々でアーサー王という誰でも知っている認知度の高い英霊を召還できたと思ったら、ガッツという全く知らない英霊が出てきたら十人中十人が落胆するだろう

（ガッツって誰よ！？傭兵！王じゃなくて！？伯父様の嘔吐き！！偽物だったじゃないの（怒）

フウ　まあ、傭兵で死線をくぐり抜けてきた感じだし、少し期待しときましよう、はい）

アリサが自分を抑え込んでいるのを見て耐えかねず

「大丈夫か？」

と発言した時にはアリサは爆発した

数分後

「フウ、ところでアナタ　ガッツのランクはセイバーじゃないの？」

「いや、残念だがセイバーではないらしい」

「えっ　じゃ、じゃあアサシンって訳？」

「いや、俺のクラスは

ベルセルク

らしい」

「ベルセルク？」

ベルセルクと聞いたアリサは頭のどこかにあつた情報を引きだそうとした

（たしか軍神オーディンの神通力をうけた戦士で、危急の際には自分自身が熊や狼といった野獣になりきって忘我状態となり、鬼神の如く戦うが、その後虚脱状態になる。この忘我状態のベルセルクは動く物ならたとえ肉親にも襲い掛かったので、戦闘ではベルセルクと他の兵士は出来るだけ離して配備し、王達もベルセルクを護衛にはしなかったという　伝説が残っていたはず）

アリサはよくこの情報を思い出せたと自分でも凄いと思う

ちなみに古ノルド語やアイスランド語ではベルセルクル、英語ではバーサーカーと言い、日本語ではしばしば狂戦士と訳される。

「ベルセルク　バーサーカーの親戚つてわけね。まあ、わかったわ。でも、なんでアナタは狂戦士ベルセルクなのに自我を保っていられるわけ

「?本来なら」

そう言っつて息を吸い込むと

「ウガーっつてなるわけでしょ」

と真似をして叫んだがガッツの視線に気付いた

「な、なによ／＼」

瞬時に自分の体を抱き締めたがガッツの視線はそんな所は気にしておらず、ただ呆れた視線を送っていただけだった

「ウガーっつて お前、俺を馬鹿にしてるのか？」

まあいい多分、俺がバーサーカーではなくベルセルクなのは一つは、武器 お前らがいう宝具の違い、もう一つは偶然、俺がイレギュラークラスだったてて事だ」

「偶然で そんな簡単に普通はいかないけどね。取りあえず情報を整理するわよ

アナタの名前は、ガッツ。クラスはベルセルクね。宝具は まだ聴いてなかったわね。何かしら？」

「 説明し辛いがまあ、凄いものだ。 」

「 凄いものつて まあ、戦場で使えるなら別に良いけど。第一、強いのか?狂化しなくてもいいくらい? 」

「やっぱりアリサ お前俺をなめてるな。俺は並みのサーヴァントには負ける気がしない。それに俺は昔、切り込み隊長をして いや、何でもない」

ガッツは最初はアリサを見返してやろうと思い、自分の過去を話し始めたが、やはり何かあったのだらう。最後の方は、言葉を濁した。表情は後悔より憤怒の方が近いかもしれない

「そう」

アリサは空気を読み、余り深く詮索しないようにした

ガッツの顔を召還した時から見ているが、ずっと右目を閉じているのはおかしいと思い始めた。そして結論を出したアリサはガッツは右目が無いと判断した。彼は傭兵と言っていた多分、他にもそういう所はあると思うさつき、包帯でぐるぐる巻きにした左手も怪しい

アリサは目の前の人物とは次元が違う場所に身を置いていたのがわかった。こんな英霊七人、自分らを入れて八人で聖杯を競うことを実感して身震いをしていた

「お前、アリサは聖杯に何を望む」

「私は桜を、助ける事かな。桜がいなかったら私はもういなかったかもしれないから、桜には救われたから今度は私が桜に何かしてやらなくちゃ」

ガッツはキヨとんとしていたがフウと深く溜め息をついた

「なぜ、桜 といったか？その言い方だと桜が今、不幸だと言ってるものだぞ」

「ええ、今、桜の体は異常なの。なにか、禍々しいもの 虫のような物があるわ。多分、桜は誰にも言えずに苦しんでいると思う。だから、私が聖杯で助けるの」

「禍々しいものか。なぜ、お前はそれが見えるんだ？」

「それはね」

瞼の下を叩きながら

「自慢の親に貰ったら特殊な目がありますから」

と答えた

「そうか」

「ベルセルク、いや ガッツこの令呪に誓にかけて桜を幸せにしなさい」

「ああ、誓おう」

膝をついたガッツが答えるが否や辺りは光で埋め尽くされ、その光が収まると令呪の一つを失ったアリサと忠誠を誓った剣士が立っていた

「これは私自身に誓ったものよ」

「お前は全くお人好しだよ。友達を救う為に殺し合いをするなんて」

「私はお人好しでも構わない」

アリサはニコツと笑った  
それはとても美しかった

「アリサ、サーヴァントの気配だ」

ガッツの一言でアリサの顔は引き締まった

「正確な位置はわからないが大体ならわかるが、どうする」

「勿論行くわ」

「あとガッツ、外では私の事はマスターと呼んであなたの事はベルセルクと呼ぶわ」



アリサは顔がばれないようローブのようなものを被っていた

「了解、お嬢さん」

「お嬢さんじゃないマスター」

準備が終わったアリサを脇に抱えながら夜の街に飛び出した  
この方向なら怪しいのは学校らしい

「もし」

「え、なに」

「無いと思うがもし俺が宝具を使うことになったら、遠くに逃げろ」

「なんで？」

「【絶対にだ】」

こうしてベルセルクとそのマスターの聖杯戦争が始まった

次の舞台は

【学校】

## stage 4 (後書き)

ふう、初コメント【無謀さん】にもらったぜ  
コメントは力になります

余りないと番外編に逃げるかも？

感想トシドシください

ベルセルク読んでる人どんだけいますかね？

## 前哨戦

- ??? ? ? s i d e r

私は学校の屋上に来ていた。理由は戦略上重要な地形を把握するた  
めらしい

「わかる？アーチャー」

「ああ、大体は把握した。そうだな 例えはあの二つを繋ぐあの橋  
…… 遮蔽物の少ないあの場所ならアーチャーの真価を存分に発揮で  
きよう。その場合私が陣取るとすれば新都のあのビルがいいだろう。」

「嘘、あんなのめちやくちや遠くじゃない！」

アーチャーが指定する場所とは遙か向こうの数キロいったビルのと  
とであった

「なに、私の力をもってすれば造作も無い」

(ふう、やっぱりサーバーヴァントってのは凄いわね。流石に目を強化  
してもあのタイルは見えないわ。…さっきの造作もないって言うて  
いた時のどや顔は少し腹がたつたけど、本当にスゴイから仕方ない  
わね)

風になびく髪を抑えながらツインテールの赤い服を羽織った女は思っていた

「あんたでさえこれなんだもの。これがセイバーだったならどんなスゴイ能力があつたのかしら」

気を悪くしたのかアーチャーはブスツとした顔で女、凜を見ていた

「なんだ、アーチャーでは不服だと言うのか」

「そりゃね、アーチャーつていえば弓……つまり後方支援が役割でしょう？」

私は魔術師だから前にでて戦うってタイプじゃないし、やっぱ剣と魔法って組み合わせの方が様になるじゃない」

「……………悪かったなセイバーじゃなくて。凜、今の発言きつと後悔させてみせる。セイバーなどより私の方が役に立つと思ひ知らせてやるつではないか」

私は一瞬理解できなかつたが、アーチャーが拗ねている事がわかつたその証拠にひとり何かブツブツ呟いていた

（意外とカワイイところあるかも…家に居るときは嫌みしか言えないかと思つてた）

「凜、何か失礼な事考えてないか？」

「いや、全然」

そう答えるときの私を妙に笑顔だったのは自分でも不思議だ

「それで貴方の真名：英雄だったところの名前は思い出した？」

ある程度街の下見は終わったので、そろそろ戻ろう思い屋上の入り口に向けて歩きながら尋ねた

「うむ、それが召還時の衝撃が強すぎたらしくてな。未だにその記憶はハッキリしていない。まあ問題は無いだろう。何せ最強の魔術師である君が呼び出したサーヴァントだ。その私が最強でないはずがないではないか」

(よくもまあそんなキザなセリフをぬけぬけと……)

さも当たり前のように最強というアーチャーに対して半分呆れた、半分頼もしく思えた

「最強とは聞き捨てならねえなア」

訪問客は突然だった

「そんならひとつ手合わせ願おうか！」

そこにはフェンスの上に人、いやサーヴァントが立っていた。確かにフェンスの上には人は立つことは出来る。しかし、ここは屋上だ。加えて私達が屋上に来たとき誰もいなかった。すなわち、外からここまで来たのだ。もはや人では有り得ない

「お前等が最強だってなら………ちつとあ楽しませてくれるんだよなア！」

青いタイトのようなものを着たサーヴァントが槍を構えてこちらに向かって跳躍してきた

(槍！？ランサー！！アーチャーには相性が悪すぎる！！)

間合いを取ろうとギリギリ後ろに下がるが、やはり屋上には限りがありフェンスまで追い詰められてしまった

(こうなったら！)

もう逃げ場がなくなった私は飛び降りて逃げる羽目になってしまった

「アーチャー！！着地任せた！」

(頼むわよアーチャー！！)

屋上から校庭に飛び降りる経験がなかった私はゴォツと音をたてる風と高速で近づく地面に多少恐怖を持ちながらも無事に着地する事ができた

「よし…今のうちに」

そう思い駆け出そうとした瞬間

「待て凜上だ!!」

言われた通りに上を見るとランサーが

「逃すか!!」

もう自分の数メートル上空にいた

(避けきれない!!もう駄目!!)

そう思ったが、後ろから来た何かが槍を弾いた

そこには白い剣、黒い剣を構えたアーチャーがいた



(えっ、双剣！！弓じゃない)

マスターである私もアーチャーが剣を使う事に驚いたが、ランサーにしても私ほどではないがランサー側も少なからず困惑しているようだ

「…テメエ、ナニモンだ  
セイバーって感じじゃねえよなあ!？」

そこには屋上に居たときとは比べものにならないぐらいに凄みをま  
したランサーがいた

「それはクラスのことを聞いているのか？  
ならばこの身はアーチャーだと答えよう」

「ふざけるな！！剣を手にしたアーチャーなど聞いたことが無いわ  
!!!」

「なに……………  
これでなかなか捨てたものでもないぞ？  
ランサーよ」

ランサーの突きを双剣で弾きながらこたえる

「弓兵風情が…斬り合いでこの俺に適うと思っただかア!!」

さっきの突きよりまた一段と速く、鋭い突きが放たれたが、アーチャーはそれを全てさばききる

(馬鹿な!? 攻めきれないというのか!!  
最速のサーヴァントたるこの俺が…ッ!!)

「うおおお!!」

そしてまたランサーが串刺しにしようとアーチャーに向かって飛び込んで行くがアーチャーはそれを上手くさばく

その時私はただ立ち尽くすのみだった

弓兵でもあるにもかかわらず双剣でランサーに対等に渡り合うアーチャー

そんな彼の予想外の強さに驚かされたというのも確かにある

だが…

何より私が見ほれていたのだ

目の前で繰り広げられる戦いに

かつての英雄たちによる人知を超えた死闘であり魔術師でなくとも

誰もが目を奪われる光景だった

そう

たとえば…誰かがそこに居合わせる可能性すら忘れてしまうほどに

急に2人のサーヴァントが戦闘を止め校舎の隅の方へ視線を走らせた

私には聞こえなかったが何らかの音に反応したのだろう。私もそれを追ってみた。確かにそこには人影があった。私は魔力で目を強化させ、その人物を見た。その人物は…

「え、衛屋くん…」

その人物とは衛屋 士郎だった

魔術師同士の戦いを第三者に見られた場合口封じのために抹殺するのが魔術師の鉄則…

だからこそ私は十分注意しなくてはいけなかった

衛屋くんを口封じのために殺さなければならぬと思うと、今更ながら少し恐怖心が込み上げてきた

もう一度校舎隅を見てみたがそこにはもう衛屋くんの姿が見えなかった

少しホツとしたが、今度は罪悪感がわいてきた

普通の人間はサーヴァントから逃れられない。

“絶対に”

「ッ！！なにぼさつとしてやがる。お前等が殺らねえーならオレが殺てやらア！！」

ランサーが士郎を追いかけてようと踏み出そうとした瞬間だった

どこからともなく現れた黒い影がランサーの頭に鉄の塊を振り下ろした

「ッチ！？何者だ！！」

何とか横に回転して回避したランサーが今、自分を襲った者に問いかける

「…チ、外したか」

そこにいた男は外した剣をまた背負い直しながら呟いた

そこには、黒い髪に黒い鎧をした男が立っていた。男の特長と言えば自分の身長より大きいんじゃないかと思われる大剣と呼ぶに相応しい剣を背負っていた

「オメー、サーヴァントか」

ランサーが正体不明の乱入者に構えながら問いかける

「…ああ、サーヴァントだ。今、マスターの命令であの坊主の近寄らせないのが俺の仕事だ」

「では、君を私達の敵と見なしていいかね？」

今まで黙っていたアーチャーも乱入者をキリツと睨み付け会話に参加してきた

「…お前のような眼は嫌いだ」

片目でアーチャーとランサーを視界に入れながら喋る

「すまないな、この眼は自分で言うのも何だが“鷹”の眼とも呼ばれていて私は十分気に入っているんだが？」

両手を組んでフツと自虐的な笑みを浮かべた

「“鷹”だと？」

アーチャーが鷹をという言葉を使った瞬間ピクツと正体不明のサーヴァントの眉が動いたのを私はみた

「ますますお前が気に食わねーな」

男の背丈ほどある大剣を片手で担ぎアーチャーに矛を向けた

「フツ、安心しろ。私もお前が嫌いだ。」

まさに売り言葉に買い言葉

空気がピシッと凍るんじゃないかと思うぐらいの殺気が辺りを支配した

アーチャーの纏っている服は防御力より運動性を重視したといえる。それに比べ真っ黒な男、黒騎士は頭と腕意外、重そうな鎧に守られている。唯一色を持ったマントは血で染めたように赤黒い

そんな事を思っているなか静寂を崩したのは意外な人物だった

「俺を無視するんじゃないやねエエエー」

ランサーだ。ランサーが槍で突進してきたが一瞬でランサーが消えて次の瞬間校舎の壁をぶち破った

今の瞬間、何がおきたか解らずとりあえず男の方を見るとさっきま

で背中に背負っていた剣を振り切った位置にあったので彼がランサーを吹き飛ばしたことがわかった

たぶん、剣の腹で殴ったのだろう。でなければ、ランサーは今頃、上半身と下半身が別れてその場に落ちていた筈だ

（見えなかった…）

アーチャーには見えていたかもしれないが私には黒騎士が動いたぐらいにしか見えなかった  
それ位速いのだ

月明かりを浴びて大剣を肩に担ぐ黒騎士をみて不覚にもその姿に見入ってしまった

それは

剣というにはあまりに大きすぎた

大きく

ぶ厚く

重く

そして大雑波すぎた

それはまさに鉄塊だった

「なんでさ」

ランサーが飛ばされたのは予想外だったのらしくアーチャーが言葉を漏らした

「…校舎に近付けるなって言われたっけな」  
そう呟き参ったたと頭を人差し指でポリポリかきながら、校舎に近づきランサーの状態を確認しようとするが後ろの攻撃によりそれはできなくなる

ガッツは背後からの双剣の攻撃を剣を盾にしてガードする  
流石に相手は双剣  
手数は圧倒的にアーチャーの方が上なので今は守りに徹する

(ちい、この大剣を使わせたら終わりだ!!その前に何か他の手段を)

アーチャーは攻撃している最中にもかかわらず、この場をいかにして上手く逃げれるかを考えていた

しかし、その時間は終わった

「グフッ」



アーチャーの攻撃に合わせてのカウンターの蹴りで倒され攻守交代を許してしまった

「しまっ」

アーチャーが体勢を立て直した時にはガッツはもう巨大な大剣を振りかぶっていた。急いで「干将・莫耶」で防かんじょう・ぼくぜごうとした

アーチャーがなんとか干将・莫耶を投影し防ごうとしたが

フツ - と短く息を吐き体に力を入れ剣を横に一閃させる

その強靱な肉体から繰り出された、強烈な一撃はアーチャーの安易な考えを吹き飛ばした

アーチャーの双剣とガッツの大剣が交わったときアーチャーの双剣（干将・莫耶）が粉々に砕け散ったのだ

（馬鹿な！？干将・莫耶はランクは高いとは言わないがこんな一瞬で！！クツ！）

ガッツが振り回す大剣をアーチャーは避けることで精一杯だ。どうしても当たりそうな一撃は干将・莫耶で攻撃を0コンマ数秒を稼ぎ避けている

もうアーチャーが投影した干将・莫耶は20を越えただろうかこのままではジリ貧のアーチャーはどうかする方法を考えていたその時だった

「糞がアー」

もう1人の蒼い獣が校舎から一瞬でガッツの背後に来ていた

ランサーの強烈な一突きを巨大な大剣でガードしたのでこちらに背を向けている状況だ。大剣の弱点は片手剣のように小回りが利かないことだ

(！？これなら殺れるか)

敵を背後から斬るということが頭に浮かんだが個々でやられたら元も子もないワケである

(もし、自分の双剣が防がれても奴の後ろにいるのは最速のサーヴァント。こちらを防いでいる内に心臓を一突きにするはずだ)

アーチャーは一瞬にしてその考えを導き出した。流石は幾多の戦場をくぐり抜けた英霊だ

そして、相手の行動パターンを読みながらも双剣を振り下ろしたアーチャー

しかし、ガッツはアーチャーの想定外の行動をしたのだ

それは、左腕で剣を防ぐとゆうものだ

大剣使いにとって腕というのは両腕とも欠かせない物なのだ  
片手が傷付いた所でもう剣は使えない。後はただの動物的である

アーチャーの剣が後数センチで届こうとしている時に相手はその包帯の巻かれた手で刃を掴もうとしたのだ

(しめた!!!これで厄介な大剣は使えない!?)

そしてアーチャーの剣がガッツの左手を切り裂いたが、切った感触は“スパツ”という柔らかい肉の感触ではなく“ギャリツ”という何か堅い岩のような感覚だった

なつとアーチャーが驚いている間にガッツはアーチャーの腕を掴み、そのままランサーの元へ投げつけた

「グフツ」「グアツ」

2人は地面を転がり数メートルしてから止まった

どうやら2人の眼にはガッツしか映っておらずランサーとアーチャー

は無意識の内にお互い停戦を決め込んでいるらしい

英霊が停戦をしてまで倒したかった相手は目の前にいる

その男は、マントを風になびかせて片目で2人を見下していた。

その男の左腕に巻いてある包帯は先ほどのアーチャーの攻撃で被れ去り、人の肌の色でない鉄のような色：銀色の手があった

「…いい夜だな」

そしてその銀色の手、義手の持ち主は目の前のサーヴァントからこんな面倒な仕事を任したマスターに向いていた

- 衛屋 side -

俺は校舎のなかを無我夢中で走っていた。

さっき校庭で見た光景が目には焼き付いて離れない

(アレは見てはいけなかったものだ…だから逃げなかったら殺される!!)

そう思い校舎の廊下を走り抜け、階段を上がり遂には一番校舎の端にまで来てしまった

ここまで来たから安心だという思いと、もし振り向いて付いて来たらもう逃げ場はないという恐怖心からゆっくりと後ろを振り返った…

そこには……

誰も居なかった

安心からくる深い深呼吸をして一瞬瞬きをした時そいつは現れた

「こんばんは衛屋先輩いい夜ですね」

そこには金髪の自分の身長より小さな女の子が笑顔で立っていた。校庭で戦っていた奴らじゃなくて瞬間的に安心していたが、

長い廊下には確かに誰も居なかったはず……

「衛屋先輩」

そんな事を思いながらも名前を呼ばれたのでとりあえず彼女の方に目をやる

彼女の方を見た瞬間体が重くなり、徐々に眠くなってきた。そして倒れる間際に見た最後の光景でおぼえているのはただ

“彼女の眼が普通でわなかったということだけだ”

前哨戦（後書き）

ふう〜疲れましたね？まずはガッツのチートさを書きたかったの  
す（・ー・；）

宝具使ったらどうなんの？（〜）

感想くれたらペースあげるかな（笑）

現在一週間ペース

感想待ってまーす

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0200r/>

---

Fate/stay night if -もう1人の狂戦士-

2011年3月7日22時09分発行